

BELIEVER'S  
BIBLE  
COMMENTARY

新約聖書注解3

コロサイ→黙示録

ウィリアム・マクドナルド [著]

アーサー・ファースタッド [編]

NEW TESTAMENT  
vol.3

Colossians→Revelation

WILLIAM MACDONALD  
Contributions by Arthur Farstad

# 新約聖書注解 3

---

コロサイ→黙示録

ウィリアム・マクドナルド著

アーサー・ファースタッド編

伝道出版社

*Believer's*  
BIBLE  
COMMENTARY

---

WILLIAM MACDONALD  
EDITED BY ART FARSTAD

PUBLISHERS  
THOMAS NELSON  
NASHVILLE • ATLANTA • LONDON • VANCOUVER

EVANGELICAL PUBLISHERS  
TOKYO, JAPAN

# 目次

著者による序文 .....	5
編集者による序文 .....	6
コロサイ人への手紙 .....	9
和解 .....	24
クリスチャンホーム .....	50
テサロニケ人への手紙 第1 .....	61
主の再臨 .....	74
終わりのときのしるし .....	88
きよめ .....	96
テサロニケ人への手紙 第2 .....	101
携挙と地上再臨 .....	104
教会の携挙 .....	119
牧会書簡について .....	131
テモテへの手紙 第1 .....	137
テモテへの手紙 第2 .....	183
テトスへの手紙 .....	217
長老 .....	221
クリスチャンとこの世 .....	234
ピレモンへの手紙 .....	241
ヘブル人への手紙 .....	251
背教 .....	281
今日へのメッセージ .....	335
ヤコブの手紙 .....	339
十戒 .....	357
神のいやし .....	381
ペテロの手紙 第1 .....	389
クリスチャンの服装 .....	419
バプテスマ .....	428
ペテロの手紙 第2 .....	445
ヨハネの手紙 第1 .....	477
死に至る罪 .....	504
ヨハネの手紙 第2 .....	507
ヨハネの手紙 第3 .....	513
ユダの手紙 .....	519
ヨハネの黙示録 .....	535

## 著者による序文

この注解書は、普通のクリスチャンが聖書を本格的に学びたいときに役立つことでしよう。けれども、どんな注解書でも聖書に取って代わることはできません。注解書にできることと言えば、おおよその意味をわかりやすく説明し、読者がさらに聖書を学ぶように仕向けることだけです。

この注解書には、むずかしいことばや専門用語は用いていません。学術的、神学的なものではありません。たいていの信者は聖書の原語に通じてはいませんが、みことばから実際的な利益や恩恵を受けることは、だれにでも可能なのです。聖書を組織的、系統的に学ぶことによって、どんなクリスチャンでも「真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人」(Ⅱテモテ 2:15)になれると確信しています。

それぞれの注解は短く簡潔で、しかも要を得ています。ある箇所に関して助けを得るために、読者が、何ページにもわたる説明を我慢して読み通す必要はありません。今日のようにだれもが忙しい状況では、真理ができるかぎり要約されたかたちで伝えられなければならないのです。

むずかしい箇所にも注釈を加えています。多くの場合、いくつかの解釈を記すことによって、どの解釈がその文脈(そして聖書全体)に照らして最もふさわしいか、その判断を読者にゆだねています。

聖書知識だけでは十分ではありません。みことばを実際の生活に適用しなければなりません。そのため、この注解書では、神の民がみことばを生活の中に生かすことができるということを示そうと努めています。

もし本書が最終目標になってしまうなら、本書を用いることは(助けではなく)わなになってしまいます。もし本書が用いられることによって、聖書を学ぶことへの興味がいつそう刺激され、主の教えに従おうとするなら、本書はその目的を達したことになります。

みことばをとおして神を知るといえるのは、すばらしいことです。どうか聖霊が読者を教え、導いてくださいますように。

## 編集者による序文

「注解書を軽んじてはならない」。1950年代末期のエマオ聖書学校(現在は大学)の授業で、ある教師がこのように助言してくれました。少なくとも一人の学生が、その後もずっと、そのことばを覚えていました。その教師とは、この注解書の著者であるウィリアム・マクドナルド氏。その学生とは、編集者である私アーサー・ファースタッド(当時は青二才の新入生)でした。彼はそれまで、エペソ人への手紙に関するH・A・アイアンサイドの注解書しか読んでがありませんでした。まだ10代の頃の夏に、毎晩その注解書を読み、アーサー・ファースタッドは注解書というものが何であるかを知ったのです。

### 注解書とは

注解書とは正確には何であり、なぜ私たちはそれを軽んじてはならないのでしょうか。最近、ある有名なキリスト教出版社は聖書関連書籍を15種類に分けました。注解書がほかの学びの本とどう違うのか(あるいは、聖書地図、聖書辞典、聖書語句辞典とどう違うのかといったことまで含めて)正確には知らない人がいたとしても、少しも驚くべきことではありません。

「注解」とは、本文の語句や文章の意味を、一節ごとに、あるいは段落ごとに解き明かすという意味です。あるクリスチャンたちは注解書を一笑に付し、「私が聞きたいのは自分に語られるみことばだけだ。だから聖書そのものを読む」と言われます。信心深く聞こえますが、そうではありません。注解書とは、(最も難解な部分も含めて)聖書の教えが詳細かつ明確に解説されたものが、単に活字になっているだけのものです。注解書の中には(アイアンサイドのもののように)、公の場で学ばれたことを、そのまま活字にしたようなものもあります。そのうえ、英語であれば、あらゆる時代、あらゆる言語のすぐれた注解書を手に入れることができます。あいにく、多くのものはあまりにも古く、時代遅れで、また、あまりにも難解なため、普通のクリスチャンは(閉口してしまう、とは言えないまでも)落胆してしまいます。ですから、普通の信者のために書かれた、わかりやすい注解書が必要なのです。

### 注解書の種類

理論的には、聖書に興味がある人ならだれでも注解書を書くことができます。そのため、極端に自由主義的なものから非常に保守的なものまで、様々な考え方のものがあります。この注解書は、聖書を「信仰と実践のために全く十分な、神の靈感による完全な神のみことば」として受け入れている点からも、非常に保守的なものと言えます。

注解書といっても、(たとえば、ギリシャ語、ヘブル語の構文について詳しく説明して



あるような)高度に専門的なものから、概略しか書かれていない、あまり内容のないものまで様々です。本書はその間のいずれかに位置しています。専門的な事柄はおもに巻末の「後注」に記されていますが、本文にも、難解な箇所や心に迫る適用を避けることなく記されています。マクドナルド氏による本書は、詳細かつ明確な説明に富んでいます。その目的は、(ありふれたクリスチャン、最低水準で満足している今日の平均的なクリスチャンではなく)弟子を生み出すことを助けることです。

注解書はその著者の神学的な立場によっても変わってきます。保守的か自由主義的か、プロテスタントかローマ・カトリックか、千年王国前再臨説か無千年王国主義か。この注解書は保守的な立場であり、プロテスタントであり、千年王国前再臨説に基づいています。

## 本書をどのように用いるか

この本の使用方法はいくつかあります。

- ① もし読者が聖書を愛しておられるなら、この本のページをばらばらめくってあちらこちらを拾い読みされるだけでも、本書の内容を味わい、楽しむことができるでしょう。
- ② 読者は、ある一節(あるいは段落)に関して疑問を持っておられるかもしれません。文脈にも考慮しながら調べてみてください。きっと良い手がかりを見いだされることでしょう。
- ③ もし読者が特定の教理、たとえば安息日、バプテスマ、選び、三位一体といったテーマについて学んでおられるなら、そのことを扱っている箇所を調べるとよいでしょう。目次を参照いただければ、どのようなテーマが特に解説されているかがわかります。本書で取り上げていない主題に関しては、聖書語句辞典を用いることによって、聖書のどこでその問題が扱われているかを見いだしてください。
- ④ 読者が属しておられる集会(教会)の学び会、聖書研究会、日曜学校などで、新約聖書を順番に学んでおられるかもしれません。該当箇所を前もって読んでおけば、大いに役立つことでしょう(ほかの人たちも本書を用いていることがわかれば、あなたはほかの注解書も欲しくなるかもしれません)。
- ⑤ 最終的には、どのクリスチャンも聖書全体を読み通すべきです。どの書巻にも難解な箇所があるので、本書のように詳細かつ保守的な本を用いることによって、あなたの学びの質や能力は大いに高められることでしょう。

聖書研究は最初のうちは退屈に思えるかもしれませんが、学びを進めて行くに連れて、たいへん味わい深いものとなります。

マクドナルド氏のかつての助言は、「注解書を軽んじてはならない」でした。英語新欽定訳に基づいて本書を編集させていただいた私は、この注解書を大変注意深く読み終えた者として、さらに一歩進んだ助言を差し上げることができます。「どうぞ、この学びを楽しみ、味わってください」と。

# コロサイ人への手紙

## 序 論

「この手紙を調べること、神の靈感によることばで表現された、神の靈感による思想について熟考すること、その思想の光と力で、たましいを満たし、いのちを形成すること。そうすれば、この世の人生、および永遠の人生が豊かなものとなる。」 R・C・H・レンスキー

### 1. 正典における独自性

パウロの手紙のあて先となっていた集会は、たいていの場合、大都市や重要な町々（ローマ、コリント、エペソ、ピリピ）にあった。コロサイはかつては繁栄した町であったが、この手紙が書かれた頃は、あまり重要な町ではなかった。そこにあった集會も、最初の頃は、それほど有名ではなかった。したがって、もしこの手紙がなかったら、コロサイという名前を知っているのは、古代史の学者たちだけになっていたことだろう。

コロサイという町は重要な町ではなかったが、パウロがそこに書き送った手紙は非常に重要な手紙である。ヨハネの福音書の第1章、およびへブル人への手紙の第1章と同様、コロサイ人への手紙の第1章には、主イエス・キリストの絶対的な神性に関する非常にすばらしい教えが記されている。この教えは聖書のあらゆる真理の土台となるものなので、その価値を強調しすぎることではないのである。

この手紙には、人と人との関係、異端の教え、クリスチャン生活についての豊かな教えも記されている。

### 2. 著者問題

パウロがこの手紙の著者であることを疑う者は、19世紀に入るまでは、ひとりもいなかった。確かな証拠があまりにもそろっているからである。外的証拠は特に有力なものである。パウロを著者とみなしたうえで、この手紙を引用している人々の中には、イグナチウス、殉教者ユスティノス、アンテオケのテオフィルス、イレナエウス（エイレナイオス）、アレクサンドリアのクレメンス、テルトゥリアヌス、オリゲネスがいる。マルキオンの「正典」もムラトリー正典目録も、この手紙がパウロによるものであることを認めている。

著者は「私はパウロである」と3度言っており(1:1, 23, 4:18)、内容もそれらの記述と一致する。内的証拠には、このような純然たる事実が含まれている。教理を説明し



たあとで実際的なことを書き記すのは、パウロに特に見られる書き方である。最も説得力のある証拠は、ピレモンへの手紙との関連が深いことかもしれない(ピレモンへの手紙がパウロの著作であることは、だれもが認めている)。その手紙に出てくる5人の人物の名前が、コロサイ人への手紙にも出てくる。ルナンのような批評者でさえ、ピレモンへの手紙との類似点に感銘を受けたが、彼は、コロサイ人への手紙がパウロによるものかどうかは疑わしいと思っていた。

パウロが著者であることに反対する者たちは、語彙、キリストに関する教え、そして明らかにグノーシス主義に言及していることを、おもな論拠としている。最初の論拠に関して言えば、コロサイ人への手紙では、新しい用語がパウロの「お気に入りのことば」に取って代わったにすぎない。サルモン(19世紀の英国の学者。保守主義者)は、その「論拠」に対して、次のように機知に富む表現で反論している。「新たに文書を書く人は、自分が著者であることを明らかにするために、それまでに使ったことばしか使うことができない、と言うのか。私はそのような教えには賛成できない」<sup>1</sup> この手紙の「キリストに関する教え」に関して言えば、ピリピ人への手紙およびヨハネの福音書の教えと全く同じである。この教えのことで悩むのは、キリストの神性を、2世紀に異教の信仰から発展したものに換えようとする者たちだけだろう。

「この手紙がグノーシス主義に言及しているから」という論拠に関して言えば、スコットランドの学者モファット(自由主義者)は、「コロサイ人への手紙に示されている初期のグノーシス主義は、1世紀から存在していた可能性がある」と考えている。<sup>2</sup>

このように、パウロがこの手紙の著者で

あることは確かな根拠に基づいているのである。

### 3. 執筆年代

「獄中書簡」の一つであるこの手紙は、パウロがカイザリヤで2年にわたって投獄されていた頃に書かれたものかもしれない(使徒 23:23, 24:27)。しかし、伝道者のピリポがそこでパウロをもてなしていたので、非常に礼儀正しいクリスチャンであったパウロが、ピリポの名前を挙げ忘れたとは考えにくい。エペソで投獄されていた頃に書かれたのではないか、と考える人もいるが、その可能性はほとんどない。この手紙とピレモンへの手紙が書かれたと考えられている年代は、パウロがローマで初めて投獄されていた紀元60年頃のことである(同 28:30, 31)。

この書を理解するために、書かれたときの状況を完全に知る必要がないのは、幸いなことである。

### 4. 背景と主題

コロサイは、(今では小アジアとして知られている地域にある)フルギヤの町であった。ラオデキヤの東約16キロ、ヒエラポリスの南東約21キロに位置していた(4:13 参照)。また、エペソの東約160キロ、カドミアン山脈の山道(約19キロの峡谷)の入り口にあり、ユーフラテス川からヨーロッパまで通じる軍用道路に面していた。コロサイはリュコス(「オオカミ」の意)川沿いにあり、その川は、ラオデキヤを過ぎた直後、西に流れてメアンデル川と合流する。そこで、ヒエラポリスの温泉からの水が、コロサイからの冷水と一つになり、ラオデキヤの「なまぬるい」状態を引き起こしたの

である。ヒエラポリスは「健康」と「宗教」の中心地であったが、一方、ラオデキヤは谷の主要都市だった。コロサイは、新約時代以前はもっと大きな町だった。この名前は、石炭岩の形が奇観を呈していたことから、「colossus」(巨像、彫像)ということばに関係があるかもしれない、と考えられている。

福音がどのようにしてコロサイに伝わったのか、正確なことはわからない。この手紙を書いたとき、パウロはその信者たちに一度も会ったことがなかった(2:1)。この町に福音を最初に伝えたのはエパfrasだった、と一般に信じられている(1:7)。パウロがエペソに3年間滞在したときに、エパfrasはパウロの働きをとおして回心した、と多くの人は信じている。フルギヤはアジア州の一部で、パウロはフルギヤには行ったが(使徒 16:6, 18:23)、コロサイに行ったことはなかった(2:1)。

後にグノーシス主義と呼ばれるようになった間違った教えが、コロサイの集会を脅かし始めていたことが、この書簡からわかる。グノーシス主義者たちは自分たちの知識(ギリシャ語の「グノーシス」は「知識・認識」を意味する)を誇っていた。彼らは、使徒たちよりすぐれた知識を持っていると主張し、「人は、グノーシス主義者の『奥義』を伝授してもらわないかぎり、真に幸福になることはできない」という印象を与えようとした。

グノーシス主義者の中には、キリストが真に人であることを否定する者たちもいた。彼らは、「『キリスト』は神の“感化力”(神から生じて、人間イエスがバプテスマを受けたときに、彼の上にとどまったもの)であった」と教えた。さらに、「キリストは、イエスが十字架にかかる直前に、イエスを離れて行かれた」と教えた。その結果、彼らの教えによれば、イエスは死んだが、キ

リストは死ななかつた、ということになる。

グノーシス主義のある分派は、神と物質の間には、いろいろな階級の霊的存在がいる、と教えた。彼らは、悪の起源を説明しようとして、このように考えた。A・T・ロバートソンは次のように説明している。

グノーシス主義者たちは、おもに宇宙の起源と悪の存在について深く考えた。彼らは、「神は善であるが、それにもかかわらず、悪が存在している」と思っていた。彼らは、「悪は物質に固有のものである」と説明した。善であられる神が悪いものを造ることはおできにならない。それで彼らは、「一連の放射物(感化力)、アイオン(霊体。訳注:至上存在より流出し、宇宙の運行の様々な機能を果たしていると考えられる力、存在)、霊たち、天使たちが神と物質との間に存在する」と仮定した。つまり、一つのアイオンが神から生じ、別のアイオンがこのアイオンから生じ、その過程が繰り返され、ついに、あるアイオンが生じたときには、もはや神は悪い物質を創造することによって汚されることもなく、しかも、神がそのわざをなすための力も十分に届く」と考えたのである。<sup>3</sup>

グノーシス主義者の中には、からだは本質的に罪深いものだとして信じて、禁欲生活を送る者たちもいた。このような自己否定的、あるいは自虐的な方法によって、霊的にさらに高度の状態に到達しようと努力したのである。もう一方の極端に走る者たちもいた。「からだは問題ではない」とか、「人の霊的生活には何の影響も及ぼさない」とか言って、放縦な生活を送ったのである。

コロサイには、あと二つの誤った教えの影響があったようである。それは反律法主義(道徳不要論)とユダヤ教であった。反律